

教職志望理由と教職履修困難 事態における学習継続

○有馬 比呂志
(近畿大学 工学部)

教職志望動機に関しては、教師効力感 (teacher efficacy) との関係 (山口・都丸・古屋, 2010; 春原, 2010) や、教職課程受講や教育実習経験との関係 (今栄・清水, 1994; 中山, 2007; 児玉, 2012), あるいは自我同一性の確立など青年期の問題としての関係を検討したもの (松井・柴田, 2008; 田中, 2018) など多くの研究がなされている。

教職課程志望理由 (以下、教職志望理由) の研究では、教職履修の目的の違いを示したものや、履修をしても教職を回避する理由を調べたもの (佐々木, 2019 など) はあるが、履修困難になった場合の教職に関する学習継続の態度を調べたものはほとんどない。そこで、本研究では、開放制大学において教職課程の学びを始めたばかりの学生の教職志望理由と学習継続との関連について検討する。

方法

調査時期と対象者 2019年4月に私立大学工学部の教職課程1年生45名を対象とした。

調査内容 教職課程の履修理由を、「教員になりたい」、「免許資格取得」、「保護者からの勧め」、「教育について学ぶため」の4つから選択させた後、「単位不足」、「教育実習前」、「教職実践演習後」の3つの時点で履修継続が困難になった際、どう対応するかを5段階からなる選択肢 (例えば、1履修継続する～5履修を止める) から選ばせた。

調査手続き 調査は、教職科目の授業で集団的に行われた。無記名で自由な記述も求めた。調査結果は個人を特定できないこと、また個人の成績には関係しないことを教示し、同意の後、調査に参加してもらった。

結果

教職志望理由 (参加者間要因4水準) と履修困難事態 (参加者内要因3水準) の2要因分散分析を行った結果、2つの主効果にそれぞれ有意差がみられた ($F(3,88)=4.35, p<.01$; $F(3,88)=6.36, p<.005$)。交互作用は有意でなかったため、履修理由について多重比較の結果、「教員」と「保護者」との間、「教員」と「資格・免許」との間のそれぞ

れに、有意な差がみられた ($t(88)=3.28, p=.002$; $t(88)=3.12, p=.003$)。また、履修困難事態ごとの教職の学習非継続的態度について多重比較を行った結果、「単位不足」と「教職実践演習後」、「教育実習前」と「教職実践演習後」のそれぞれの間に有意な差がみられた ($t(88)=4.09, p<.001$; $t(88)=2.42, p=.017$)。

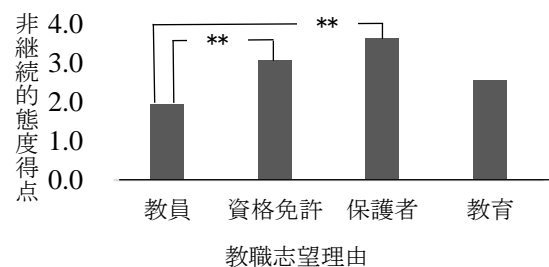


図1. 教職志望理由と学習非継続的態度

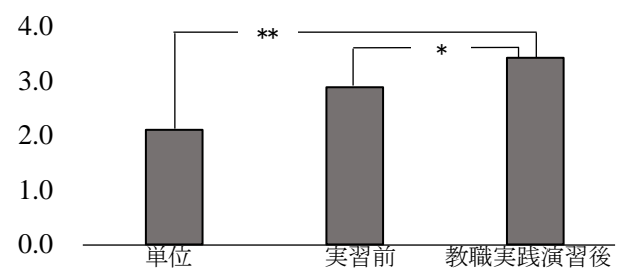


図2. 履修困難事態の学習非継続的態度

考察

「資格・免許」と「保護者」を教職志望理由とする学生は、「教員」を志望する学生よりも教職の非学習継続傾向が高いことが示唆された。一方、「教育」の学生は教員志望でなくとも、学習継続意思があることが明らかになった。教職学習における自己決定が及ぼす動機付けの影響が考えられる。しかし、これらの結果は将来の学習行動の予測であり、自己効力の程度が現れたものと推察される。今後は実際の行動変化を指標することに加え、「教員」の志望学生の詳細な動機の分析と、「教員の勧め」、「恩師への憧れ」等の志望理由と教職学習との関係について検討する必要がある。